果しなき流れの果に

小松左京

日本SFシリーズ10

早川書房

小松左京

果しなき流れの果に

著者略歴

昭和6年大阪に生る　昭和29年京都大学文学部卒
1962年度SFコンテスト入賞
主著書
「地には平和を」早川書房刊
「影が重なる時」早川書房刊
「日本アパッチ族」光文社刊
「復活の日」早川書房刊
「日本売ります」早川書房刊　他多数

印
検
止
廃

定価　四〇〇円

果しなき流れの果に
日本SFシリーズ〈10〉

昭和四一年七月一〇日　印刷
昭和四一年七月一五日　発行

著者　小松左京
発行者　早川清
印刷者　鈴木静

発行所　早川書房
東京都千代田区神田多町二〜二
電話　東京（二五〇）一五五一〜八

用紙・サツキセイシKK／クロース・東洋クロースKK／印刷・東洋印刷／製本・堅省堂

果しなき流れの果に

――妻に、
――I・S、K・I、T・Sの諸氏に、
――〝コア〟と〝天人会〟の人たちに。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

目次

プロローグ……七
第一章　象徴的事件……一五
第二章　現実的結末……五八
エピローグ（その2）……九七
第三章　事件の始まり……一一〇
第四章　審判者……一四四
第五章　選　別……一九〇
第六章　襲　撃……二三六
第七章　狩人たち……二六一

第八章　追　跡……二九六
第九章　狩りの終末……三三一
第十章　果しなき流れの果……三七一
エピローグ（その1）……三八五
あとがき……三九一

プロローグ

土n

大地がまたはげしくゆれた。

蘇鉄の巨木密生林の中で、下ばみのシダの若芽をむさぼりくっていた、巨大な生物が、不安そうに小さな頭をあげた。——長さ十数メートルに達する巨体にくらべて、頭はひどく小さく、葉をかみしめながらあたりを見まわす眼には、臆病さと愚鈍さのいりまじった表情がたたえられている。

大地はふたたびゆれ、見あげるばかりの蘇鉄の葉と幹が、ザワザワとゆれた。——ドーンと、空気を鉄板でひっぱたくような音がすると、あとは遠雷のようなとどろきが、高く、また低く、とめどもなく大地の底をゆさぶりはじめた。——突然天をおおっていた蘇鉄の葉がなると、なにかがシダのしげみの中にバサッと落ちてきた。——かすれたような、はげしい声をたてて、しげみの中からなにか小さな黒いものがとび出して、矢のように別のしげみにとびこんだ。おちて来た紡錘形の石は、たちまちシダのしげみをうす青い煙をたててこがした。火山弾はしばらくの

間、ひっきりなしにふりそそぎ、林の中には、やけた鉱物と、亜硫酸ガスと、植物のこげるにおいがたちこめた。

あの巨大な生物の姿は、いつのまにか林の中に見えなくなっていた。——しかし、火山弾の落下がやっと小やみになり、かわりに網の目のように空をおおう葉の天井に、火山灰がサラサラと音をたてはじめたころ、シダのしげみの中にもり上った、小高い、苔や小さなシノブ類のシダでおおわれた岩が、ゴソリと動いた。

岩と見えたのは、さっきの生物だった。——しげみの間にはい出た姿を見ると、末期剣竜類の一種らしかった。——もり上った背中につったつ、大きな盾のような二列の突起は、外敵の防禦のためというより、むしろ擬態のための小道具らしい。さっきのように、しげみの中にうずくまってしまうと、びっしり苔や、小さな植物におおわれ、灰緑色の突起をつらねたその背中は、岩としか見えなくなってしまうのである。

剣竜は、しげみをザワザワかきわけて、あるき出した。そのあゆみは緩慢でおぼつかなく、小山のような体に比して、おそろしくちっぽけなその頭には、なんの表情も見えない。——林をぬけて、赤土のむき出しになった平原をつっきろうとした時、この哀れな生物は、ちょっとまよったように見えた。まばらな草におおわれ、ところどころに灌木林や、しげみや、露岩のちらばるゆるやかなスロープは、ひっきりなしに痙攣しているようにみえた。——大地がビリビリふるえるたびに、草原の上に、波のようなざわめきが散って行く。

小動物——新顔のちっぽけな有袋類や、まだ四肢の痕跡をはっきりつけたまま、身をくねらせて行く蛇や、カンガルーみたいにピョンピョンとぶ小型の恐竜類、それに空には、歯のある鳥

が、不吉な声をひびかせ、スロープの下、海か湖かわからぬ彎曲した鉛色の岸辺へむかって逃げて行く。蘇鉄林の背後で、火山はおそろしくムクムクした、葉牡丹のような噴煙を、沖天高く吹きあげていた。あつい砂礫が、ひっきりなしにふりそそぎ、空は灰色のベールに半分以上おおわれ、太陽は血のしたたるような色にかわっていた。

このあたりでは、もうめっきり数のすくなくなった、生きのこりの一匹である剣竜は、鳴動する大地をふみしめながら、ちょっとためらっていた。

――あの小動物たちとともに逃げるべきか？

だが、彼の長年の棲み家であり、安全な食堂であるあの蘇鉄の林をすてるのは、ひどく心のこりだった。――気候が次第に寒冷化し、おまけに激発する大噴火にやきはらわれて、この緯度圏では、彼の楽園である蘇鉄群生林も、ほとんど絶滅しかけていた。かわって、いじけた松柏類が、次第に奥地から南下しはじめている。

剣竜には、ほとんど記憶らしい記憶はなかった。――彼の一族の脳髄は、奇形なほど小さすぎ、おまけに頭部と腰骨のあたりの、二つに分離されていた。だからもし、この四体ばかりでかい、あわれな草食爬虫類に、記憶とよべるものがあれば、それは、長い脊髄灰白質全体に、かすかな痕跡をとどめているにすぎなかったろう。――しかし、彼はぼんやりとおぼえていた。スロープをくだって行くことの危険……本来は、このスロープそのものが、むかしは存在せず、豊富な沼沢地をちりばめ、植物は繁茂し、からみあった平坦地であったこと――そして、ある時突然、大地が今日のように鳴動し、火を噴いた時に、沼沢地の一方がもち上り、その上を灰がおおって、今のスロープができたのであること……

剣竜は、まだまよっていた。スロープの下の恐怖は、グロテスクな彼の巨体のどこかにのこっており、それが彼の足をすくませた。——だが、その時、背後でまたもや大爆発がおこった。炎や煙を吹きながら、裂けたパン皮のような岩塊が、うなりをあげて周囲におちた。その一つは、彼の背の突起の間にはさまり、鱗のようになった厚い皮膚を焦して、するどい痛みを肉につき通した。今度こそ、剣竜は走り出した。体をゆすって、あきれるほどのろのろと……。背後よりせまる危険と、眼の下にひそむ危険が、彼の足を、ななめにむかわせた。スロープの中腹に、長い、けわしい断層崖があり、彼はその下へむかって歩みをすすめたのだ。草原は、あちこち火がついていた。最初の爆発の火山弾でうたれ、傷ついてたおれた小動物の姿も、ところどころに見えた。あきれるほど無器用に、よたよたと大地をふみしめる剣竜の足は、そういった生物の死体の一つをふみつけた。——大きな、ガス孔のいっぱいある火山弾に頭をうちくだかれて、よこたわっているその生物の死体は、ほっそりとして、長さ二メートルぐらい。脚が長く、全身を黒い光沢のある皮のようなものにおおわれ、顔の部分と前肢の尖端だけが白く、一方の前肢の先には、なにか妙な、円筒型のピカピカ光る金属の筒をもっていた。——だが、むろん、剣竜は、そんなものには、見向きもしなかった。

やっと断崖の下に達した時、剣竜の足は、凍りついたようにぴたりととまった。——断崖の下には、先客がいた。あのスロープの下の『危険』が……。あとずさりができない。うすのろの剣竜は、船が方向をかえるように、よろめきながら方向をかえようとした。高さ七メートルのところにある、おそろしく巨大で、残忍そうな頭は、剣竜のそんなまぬけな動きを、なんの関心もないような眼つきで、冷然と見おろしていた。だが、剣竜がやっと横にむきをかえ、もり上った背

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

中をゆさゆさとゆすぶって歩き出した時、その巨大な頭は、突然ブワッと口をひらいた。
ぬれた焔のような、いやらしい、ピンクと赤とオレンジ色に光る口腔のまわりには、剣のようにとぎすまされ、先が内側へむかって彎曲した歯が、ズラリと二列にならんではえていた。ひらかれたその口は、後頭部にまで裂け上っていた。口裂のはしには、その巨大な顎をしめつける、水圧器のアームのような筋肉がむき出していた。まばたきしないその眼は、一対の、血の色をした炎だった。巨木のようなその尾が、大地をズシンとたたくと、二十トンもあるその巨体は、かるがるとはねて、一足とびに剣竜の正面に立ちはだかった。——剣竜は、大地にうずくまった。もはや擬態ではなく、腹をぴったり大地につけたまま、背中の盾のような突起をおしたてて、威嚇するように動かし、ひとかかえもありそうな、鋭い、曲った棘のはえた尾を——彼の唯一の『武器』を、ビュッ、ビュッと左右にふった。
だが、有史以来、地上に存在した生物の中で、もっとも凶暴で、もっとも巨大な暴竜——ティラノザウルス・レックスにとって、そんな反抗は、なんの意味もなかった。剣竜の鋭くとがった尾の先が、その比較的やわらかい腹の皮を、ピシッとうち、腹の皮が裂けて、かすかに血がにじんだ時も、この地上の王者は、歯をむき出したまま、微動もしなかった。——断崖をこえてきた火山弾の一つ二つが、その頭にあたったが、半トンもありそうな、口ばかりといっていい巨大な頭は、ゆるぎもしなかった。やがて、暴君は、突然巨岩の柱のような後肢をあげて、剣竜をけたおした。後肢の鋭い爪で、横腹の一部をきりさかれた剣竜は、横たおしになって、バタバタもがいた。——びっくりするほどの敏捷さで、はねおきて退却しようとするその頸を、ティラノザウルスの後肢がふんづけた。

いやな音がして、剣竜の首の骨が折れた。

しかし、剣竜は、だらりと地上にたれた頭をひきずって、なお逃げようとした。——脳髄の小さな彼にとって、頭はそれほど大した意味をもたないのだ。——暴君はしかし、今度はその巨大な頭を前にかたむけて、はしからはしまで、一メートル半もありそうな、その口で、ガブリと餌物の頸にかみついた。万力のような頸が、骨をかみくだき、カミソリのような歯が、かたい皮と肉を切り裂いた、軽い一ふりで、頸はすっぱりと切りとられ、暴君の口にくわえられた。後肢にくらべて、おそろしく小さくて精巧な、それだけにかえって邪悪な感じのする前肢の爪で、その頸をしっかりおさえ、ティラノザウルスは、ほんの一かみか二かみで、その頸をのみこんだ。——頸のない剣竜の胴体はくいちぎられた所から、はげしく血を吹き出しながら、それでも、ひどくしっかりした足どりで、のがれ去りつつあった。——暴君は、たけだけしい足どりで、そのしぶとい胴体にちかづくと、後肢の一撃を、今度はめくらめっぽうにふりまわされている尾のつけ根にくわえた。グギッと音がして、剣竜の後肢の関節がはずれた。今度こそ、胴体はどうと横たおしになり、立ち上ろうとしなかった。しかしその四肢は、まだのがれ去ろうとするようにもがきつづけ、太い尾はバタリ、バタリと大地をたたきつづけた。

獲物に近づくと、暴君は食事にとりかかった。血まみれの歯で、胴腹の柔らかい皮膚にガップリかみつき、ぐいとひっぱり、小さな前肢の鋭利な爪で、その柔軟な皮をひきさいた。——容積こそ剣竜より大きいが、機能においては餌食とあまりかわらない。その冷たい、暗黒の脳髄の中には、喜びもなく、せまりくる危険に対する洞察もなく、ただうちたおした餌物を食いちらし、血をすすり、肉をのみこんで胃をみたす、ガツガツした衝動しかなかった。ふりそそぐ火山灰

や、火山礫、大地のたえない振動などには、一向に頓着なく、彼はひたすら、餌物にくいつき、かみくだき、のみこんだ。

と――突然彼は、そのグロテスクな頭をキッとあげた。なにか奇妙に耳ざわりな物音――彼がこれまで一度もきいたことない、小さな、しかしけたたましい物音が、つたわってきたのだ。

それは、断絶して、規則的になりわたった。噴火と鳴動の最中にもかかわらず、はっきり、きわだって鳴りひびいた。――ひどくいらいらするひびきだった。この巨大なタイラントが、何十年も生きつづけて来た間、一度もきいたことのないようなひびきであり、それは彼に今まで経験したことのないような焦立ちと怒りをかきたてるひびきだった。

彼はその血だらけの、巨大な頭を、ゆっくりとめぐらせた。血の泡にまみれて、くいしばられたむき出しの歯からは、臓腑や腱が、赤い滴をひいていくすじもたれさがっていた。――やがて、その冷たくもえる、赤い眼は、音のひびいてくる方角にぴたりとむけられた。――それは、すぐ傍の断崖……大地のふるえるたびに、たえず土砂や、岩石がなだれおちてくる断崖の下からだった。わけのわからない、凶暴な怒りにかられて、ティラノザウルスは食べかけの餌物をほったらかし、音のする方角にむかって突進した。――二十トンの重量で大地をふみならし、歯をガチガチとかみならして……。勢いあまって、断崖にどすんとぶつかり、頭からザッと土砂をかぶっても頓着なく、彼は息をあらげて、音の源をもとめつづけた。

（出てこい……）もし、彼に言葉があったら、こう叫んでいたろう。（おれの領土に、きいたこともない、無礼なひびきをまきちらす奴は誰だ？　どこにいる？――出てこい！）

ついに彼は、音のほとばしり出てくる箇所をつきとめた。――断崖の一部に、たてに細長く、

奥深い裂け目があって、音はその洞窟の奥からきこえてくるのだ。彼は声のない唸りをあげて、その裂け目に突進した。——だがそのばかでかい頭蓋骨が両側の岩にガチンとつかえて、かろうじて鼻づらの一部がはいっただけだった。音はまだ、しつこく、うるさく鳴りつづけた。彼は裂け目にもぐりこもうと、もがいた。——岩がバラバラとおちてきたが、それ以上はどうしてもだめだった。かろうじて、眼のあたりまでもぐりこませた彼は、うすぐらい洞窟の奥に、やっと音を発するものの正体だけ、見ることができた。

それは——

身をふるわせて、カン高い金属音を発しつづける、一箇の、奇妙な形をした、金色の電話器だった……。

第一章　象徴的事件

1

「どうぞ……」と教授の声がした。「はいりたまえ」

野々村は真鍮のノッブのひどくからまわりするドアをあけた。――鍵がいやにガチャガチャなるのが、教授の神経にさわらないかと、気になった。

部屋の中は、しめった冷たい空気にみたされて、しんとしていた。明るい廊下からはってくると、しばらく眼をしばたたいていなければならないほど、うす暗かった。――大泉教授は、ずっと眼をわずらっている。外では濃いスモークのサングラスをかけ、部屋の中はいつもブラインドをおろしている。

眼がなれてくると、教授とむかいあって、もう一人の人物がすわっているのが見えた。――でっぷり肥って、いい服装をしている。精力的な顔で、太い黒縁の、ボックス型の眼鏡をかけ、意志的な、大きな顎をしていた。実業家かな？――と野々村は思った。

「野々村くんです……」と大泉教授はしずかな声でいった。「K大史学部の番匠谷教授だ」

ああ、あの人か……と、野々村は思った。理論物理の彼でも、その人物の名はきいたことがあった。K大の番匠谷――なんでも屋、それに財界、政界、海外にも顔がきき、ひどく精力的で、スキャンダラスな学者だった。学者なんかやるより、政治家にでもなったほうがいい――とみんなかげ口をきいていた。そのくせ、講座はそこらへんのみみっちいタレント教授よりもキチンと維持しているし、時々突拍子もない、派手な業績をあげて、学芸ジャーナリストをあっといわせる。だが学者の世界では孤立させられており、その研究はアカデミストから白眼視されることが多かった。その研究が、従来の学問体系の盲点をつけばつくほど、敵視されるのだ。――大学とは、もともとそんな所だ。

「かけたまえ」と教授はいった。

野々村は、ベルベットの毛がほとんどすりきれて、スプリングの形がとび出したソファに腰をおろした。

だが、その番匠谷教授が、なんだって大泉教授のところに?――大泉教授は、かなり浮世ばなれしたN大理論物理研究所の中でも、『隠者』とよばれるほどひどくとびはなれた存在だった。若い人たちの間では、完全にロートル視され、その研究分野は、ほとんど評価されず――いや、専門学者の間では、すでに妄想狂ではないか、というかげ口さえたたかれているのだ。――事実、前任大学で、教授が頭がおかしくなった、と思われるような事件が発生したこともあり、野心家の弟子に足をすくわれそうになった。教授が旧制高校で教えていたころ教え子だった、N大の理論物理研究所長が、飼い殺しを覚悟でむかえいれなかったら、本当にたたき出されていたかも知れなかったのである。――この研究所でも、大泉教授は、ほとんど講義をしなかったし、研

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl